

## 総務省予算執行監視チーム第4回会議 議事概要

1 日時 平成22年5月19日（水）14:00～15:00

2 場所 総務省省議室

3 出席者

○外部有識者

有川 博 日本大学総合科学研究所教授

井手英策 慶應義塾大学経済学部准教授

須藤 修 東京大学大学院情報学環教授

○総務省

渡辺総務副大臣、内藤総務副大臣、長谷川総務大臣政務官、小川総務大臣政務官、  
階総務大臣政務官

福井大臣官房総括審議官（事務局長）、今林大臣官房会計課長（事務局次長）、

熊埜御堂大臣官房政策評価広報課長（事務局次長）

官房企画課情報システム室長、人事恩給局恩給企画課長、行政管理局情報システム  
企画課長、自治行政局選挙部管理課長、自治行政局住民制度課長、情報通信国際戦  
略局宇宙政策課長、情報通信国際戦略局技術政策課長、情報通信国際戦略局研究推  
進室長、情報通信国際戦略局情報通信政策課長、情報流通行政局利用促進課長、情  
報流通行政局情報流通振興課長、総合通信基盤局電波環境課長、統計局調査企画課  
長、政策統括官、消防庁救急企画室長

4 議事

（1） 両副大臣挨拶

（2） 行政事業レビュー（公開プロセス）について

（3） その他

5 議事概要

（1） 両副大臣より挨拶

（渡辺副大臣）

○初めて外部有識者の方々にご参加いただいた。政治主導で予算執行の状況や独  
法・公益法人支出のあり方について、根本から見直しをしているところだが、有

識者の皆様方のご知見とご経験をお借りしたい。

○行政事業レビューは、事業仕分けの定常化と言うべきもの。総務省は、行政評価を所管する立場であり、政策評価と行政事業レビューは連携を強化して、各省の模範となるような取組を展開していきたい。

(内藤副大臣)

○よく言われることだが、予算づくりとか新たな事業を立ち上げるときは、皆大きな関心を示しつつも、決算になるとあまり関心を示さず、不要な予算配分が続いてきたということがある。新しい政権下においては、そういったことは断じて許してはならず、徹底的に見直しをして必要なところにしっかりとお金を配分していこう、という思いでこの予算執行監視チームを立ち上げた。この議論を何としても来年度の予算づくりに反映していきたい。

(2) 行政事業レビュー（公開プロセス）等について事務局より説明。

(主な意見等)

○行政事業レビューが「事業の遂行が税金投入の効率性や効果の面から適切であるか検証を行う」とあるが、具体的な基準をどう考えているか。

○政策評価制度は、出来る限り定量的に評価していこうという努力が進められていると思うが、今回公開プロセス対象事業について、過去政策評価ではどのように分析しているか。

(政策評価広報課長)

○政策評価は、事業単位というよりは政策自体をどうするかということでやってきたことがあり、なかなか具体的な基準となっているわけではないのが現状。

○今年度の目標設定については、政務3役のもと数値の定量化などに取り組んでいるところ。

(主な意見)

○支出の結果、人々がどう評価したのかというところを基準に織り込めないか。

例えば、電子政府・電子自治体の推進について、基本目標に個人認証の整備率やオンラインの利用率などがあるが、国民が求めている施策かというのがわかりづらく、そこを評価するのは住民のはずである。

○統計が整っていないなど、現在は、定量指標というのが困難な状況。電子政府評価について、アメリカ、EUなど指標形成にかなり努力をしており、我が国

も評価のための指標形成をきちんとやる必要がある。

○絶対評価が本質的に難しい分野については、例えば各省の数字を横に並べるなど、相対評価をして横でみるということも考えてはどうか。

### (3) その他

資料5「平成22年度予算執行計画」について、今林会計課長より説明。

#### (主な意見)

- 個々の費目を精査するという作業を通じて人々のニーズを的確に掴んでいく。そうすれば、低いコストで予算は組めるはずだという発想の逆転が重要。
- 事業主体とチェックを受けるための手続きの合理的なバランスが良く考えた方がよい。国民、住民の方々の満足度を高めるにはどうしたらいいかというところに力を割けるような時間を確保するということが重要。
- 予算執行の効率化や効果的な指標づくりに取り組むとともに、仕事の量も減らしていく、仕事全体の効率化ということも考えていかなければならない。
- 常々感じていることとして、各部署の方は、一生懸命やっつけらっしゃると思うが、お互いに連携がとれていないためにトータルとしていいパフォーマンスを上げていないということがある。効率性を高めるという観点でいうと、組織のグルーピングうまく考えるということも、予算づくりあるいは指標づくりの際に必要なものだろうと感じている。